ジャンル別アレンジ/サウンドメイク
ロックンロール

©OTO × NOMA ©TEMPEST STUDIO ©Sigeru Aoyama

OTO×NOMA

ロックンロールとは？

ブルース、R&B等の黒人音楽と、カントリー&
ウェスタン等の白人音楽が融合して1950年代に登場。

シンプルなコード進行、強烈なバックビート、
リーゼントや不良っぽいスタイルが特徴。

スタープレイヤー達の失脚で流行は短命に終わるが
ビートルズ、ローリングストーンズら新しい世代に
受け継がれ、ロックへと昇華して行く。

©OTO × NOMA ©TEMPEST STUDIO ©Sigeru Aoyama

OTO×NOMA

ロックンロール の特徴

A7	(D7)	A7	A7
I7	(IV7)	I7	I7
D7	D7	A7	A7
IV7	IV7	I7	I7
E7	D7	A7	(E7)
V7	IV7	I7	(V7)

ブルース同様、概ね12小節の進行。（曲によって多少の差異はあり）

流行して行く中で循環進行（I−VI−IV−V）などのポップな進行も取り入れられた。

©OTO × NOMA ©TEMPEST STUDIO ©Sigeru Aoyama

OTO×NOMA

ロックンロールのサウンドメイク

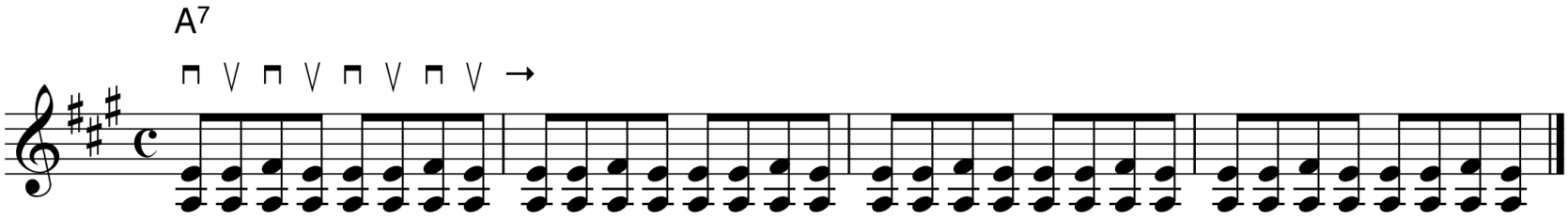
Marshallはまだ登場しておらず、Fenderのコンボアンプが主流
ギターも選択肢は少ない

ハムバッカー系のギターをFender Twin Reverb等に挿しただけの
シンプルなサウンドでOK、
ロカビリー寄りのプレイならスプリングリバーブもよく合う。

©OTO × NOMA ©TEMPEST STUDIO ©Sigeru Aoyama

OTO×NOMA

ロックンロールのアレンジパターン①



ど定番のパターン。パワーコードを基調に、上の音は5thと6thでリズムを刻む。
3拍めに7thまで行くパターンもあるが、かなり手が大きい人でないとしんどく、
6thまでの方が多い。

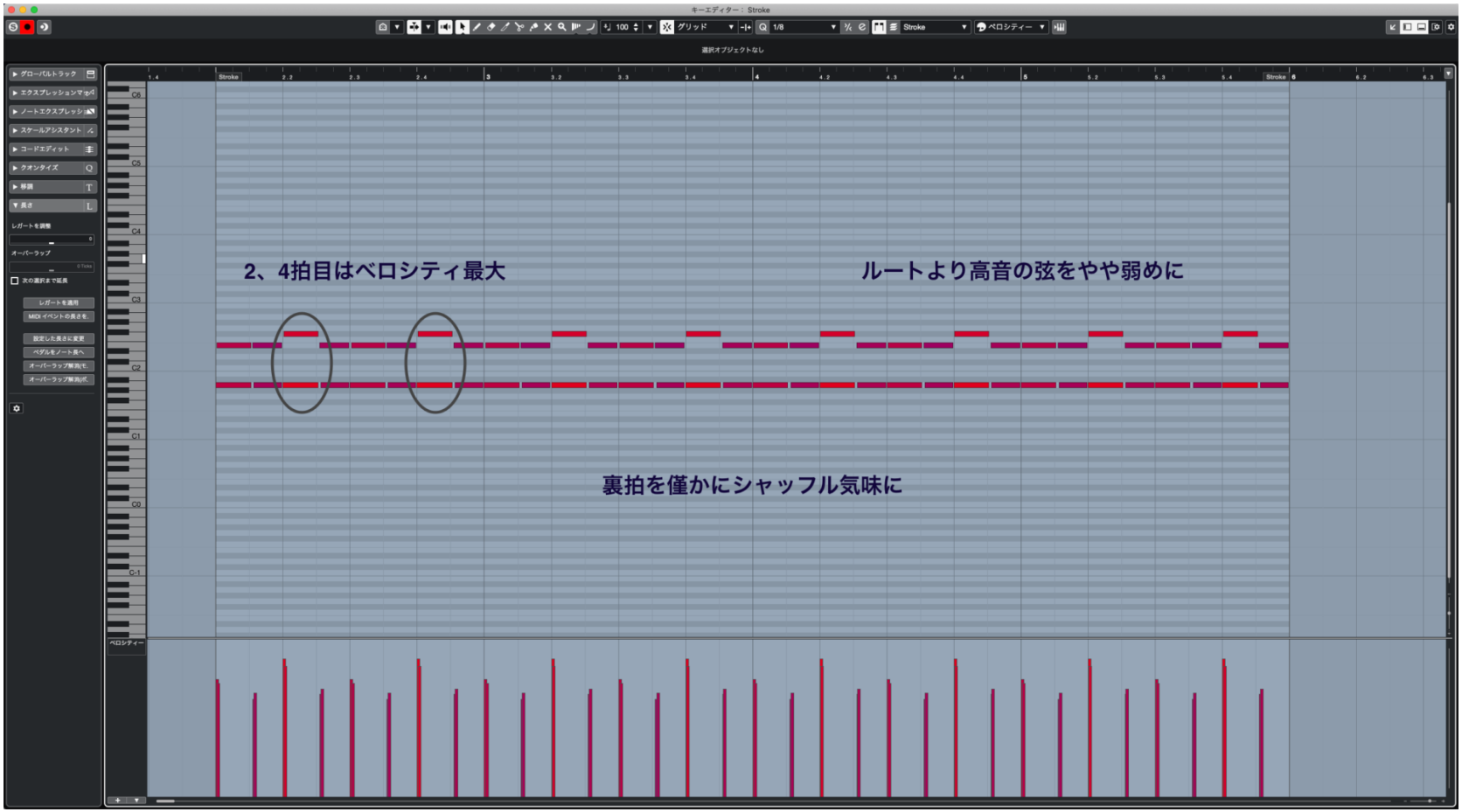
ピッキングは8分のオルタネイト。ウラ拍を軽くシャッフルさせた方がそれっぽい。

基本はハイポジションで弾かれることが多い。

©OTO × NOMA ©TEMPEST STUDIO ©Sigeru Aoyama

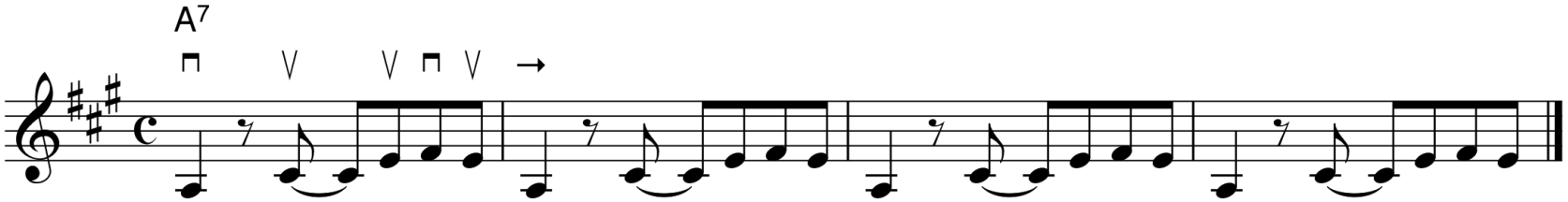
OTO×NOMA

ロックンロールのアレンジパターン①



©OTO × NOMA ©TEMPEST STUDIO ©Sigeru Aoyama

ロックンロールのアレンジパターン②



パターン①に次いでよく使われるパターン。ベースとユニゾンになる事が多い。
このようなパターンにはスプリングリバーブがよく使われる

1拍アタマ、2拍ウラ、4拍頭の3箇所にアクセント。
パターン①同様ウラ拍をシャッフルさせる。

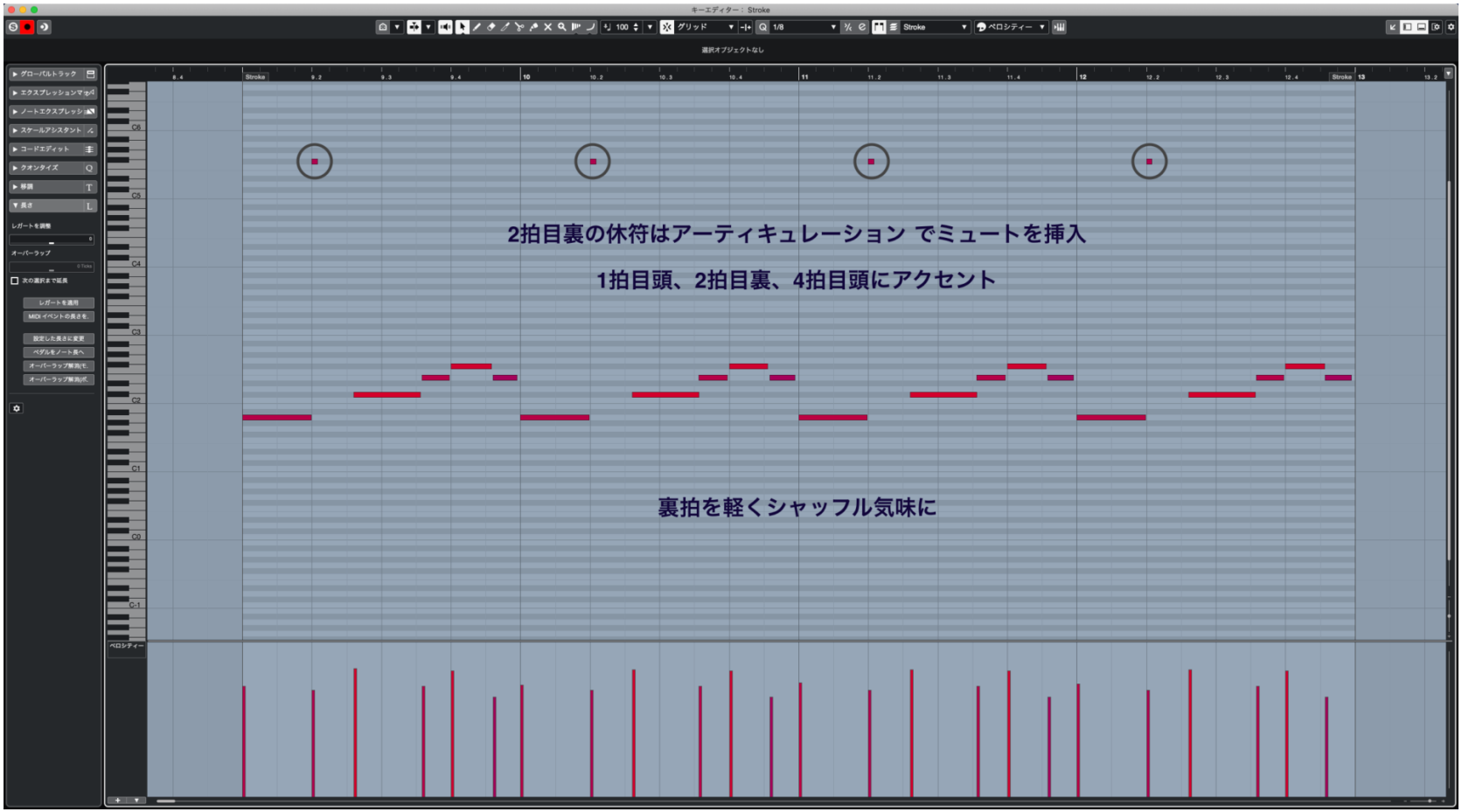
2拍アタマにミュートのアーティキュレーション。

フレーズ系の単音弾きの場合は開放弦の使えるローポジションの方が
抜けの良いパキッとした音になるのでオススメ。

©OTO × NOMA ©TEMPEST STUDIO ©Sigeru Aoyama

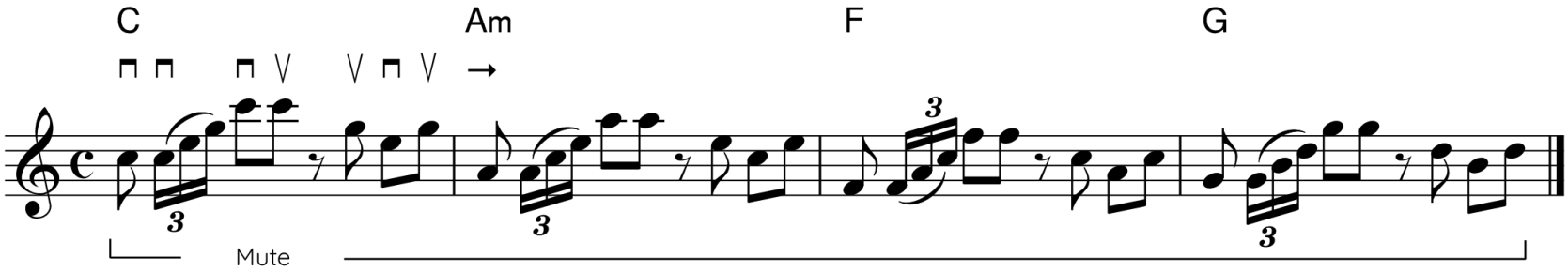
OTO×NOMA

ロックンロールのアレンジパターン②



©OTO × NOMA ©TEMPEST STUDIO ©Sigeru Aoyama

ロックンロールのアレンジパターン③



ポップスよりの楽曲でのパターン。コード進行もブルース由来のものではない。
全弦ミュートしてコードを分散して弾くスタイル。

パターン②と同じ3箇所にアクセント。3連符は突っ込み気味に。

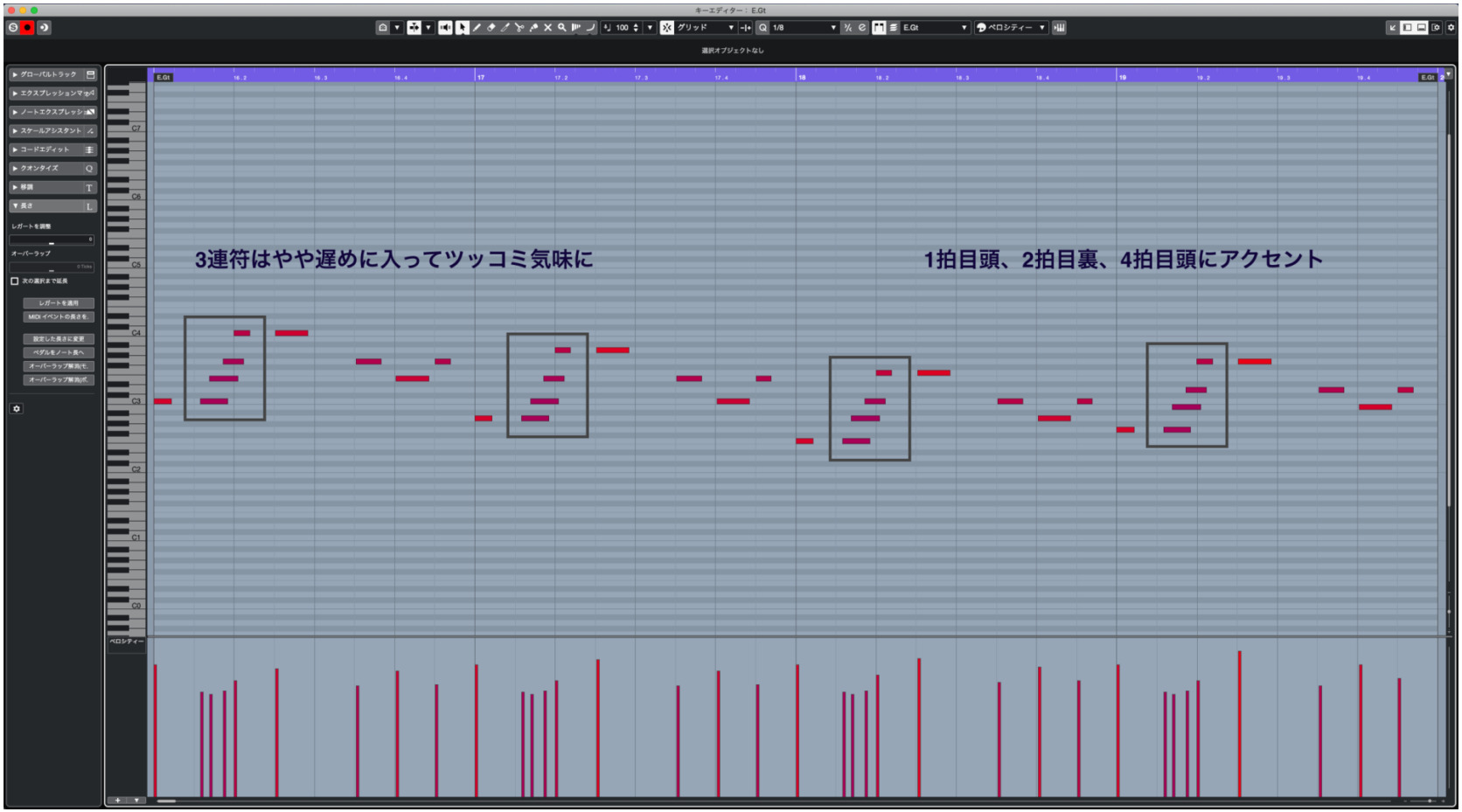
2拍アタマにミュートのアーティキュレーション。

ポジションはずべて同じ押さえ方で移動するため、1小節目8～10F付近、
2小節目5～7F付近、3小節目1～3F付近、4小節目3～5F付近となる 。

©OTO × NOMA ©TEMPEST STUDIO ©Sigeru Aoyama

OTO×NOMA

ロックンロールのアレンジパターン③



©OTO × NOMA ©TEMPEST STUDIO ©Sigeru Aoyama